

霞

- 2009年度夏季展示室だより -

土浦市立博物館

平成21年7月1日発行(通巻第8号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(8)

絵葉書「土浦名所 紅葉ヶ丘色川三郎兵衛翁銅像」



色川三郎兵衛は、常磐線の路線計画を霞ヶ浦寄りに変更して線路に逆水防止の機能をもたせ、町を洪水から守った人物として顕彰されました。昭和12(1937)年、桜川や土浦町を眼下におさめ、霞ヶ浦・筑波山をのぞむ紅葉ヶ丘(下高津、常福寺境内)に銅像が建立されています。この銅像は戦時中に金属回収で供出され、昭和55(1980)年に土浦港近くの現在地に再建されました。【情報ライブラリー検索キーワード 色川三郎兵衛】

目次

古写真・絵葉書にみる土浦(8)・・・	1
博物館からのお知らせ・・・	1
【2009年度夏季の展示資料解説】	
東城寺経塚群(古代)・・・	2
常陸国富有人注文(模造)(中世)・・・	3
牽牛花水鏡(写真パネル)(近世)・・・	4
霞ヶ浦と城下町の生業(近世)・・・	5
洪水の写真絵葉書(近代)・・・	6
市史編さんだより・・・	7
「霞」短信 墨珺こぼれ話・・・	8
コラム(8)・・・	8
情報ライブラリー更新状況・・・	8

博物館からのお知らせ

館長講座(茂木雅博館長) 7/19(日)「茨城県のお墓のはじまりと終り」、8/9(日)「土浦の古墳」 午後2時~

夏休みファミリーミュージアム 7月22日(水)~8月30日(日)

テーマ展「書の達人 土浦藩士関家の人々」

土浦藩の書家関家は、享保8(1723)年に関思恭(せきしきょう)が藩士に取り立てられたことから始まり、幕末の雪江(せつこう)まで代々土屋家に仕えました。関家の人々は書の「達人」として知られ、なかには江戸で塾を開いて多くの弟子を育てたり、文人らと交流したりした人もいました。

展示案内会 7/26(日)・8/1(土)・8/15(土) 午後3時~

夏休みスペシャル講座「どうしたらわかるの江戸時代、江戸時代をもっと知ろう！」

とき 8/6(木) 午後2時~3時30分 定員50名(要事前申込、7/8(水)から受付)

第1部 「書の見どころをお教えします」 講師:林とみこさん

第2部 「土浦藩士のお仕事 書家、絵師、鉄砲指南、御医師」 講師:当館学芸員

夏休みファミリーミュージアム体験講座(くわしくは夏休みファミリーミュージアムのチラシをご覧ください)

「ミニ掛軸をつくろう！」(講師:土浦市拓本同好会)、「親子はたおり教室」(講師:綿の実)

「親子史跡めぐり 遊覧船によって霞ヶ浦の自然と歴史をまなぼう」、「和とじ本をつくろう」などを開催!!

テーマ展「烈公打ちの刀 - 水戸刀工と金工の名品 - 」9月19日(土)~10月11日(日)

土浦藩土屋家に伝わった水戸徳川家9代藩主斉昭が作刀した刀剣を中心に、水戸刀工と金工の名品をご紹介します。当館所蔵の重要文化財もあわせて公開します(本年度はニューヨーク市メトロポリタン美術館への出品のため国宝の短刀「筑州住行弘」、重要文化財の太刀「恒次」の公開はございません。ご了承ください)。



博物館マスコット
亀城かめくん

お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

東城寺経塚群

- 発見が早すぎた古代のタイムカプセル

市内、東城寺本堂（旧、薬師堂）の裏山には、12基の経塚が残されています。経塚は、11世紀初め頃に広がった末法思想を背景に、作善事業（よい報いをもたらす善行）の一種として造られたとされています。末法思想とは、釈迦の入滅後、徐々に仏の教えが衰退するという予言的思想で、日本では1052年に末法に入ったとされています。末法思想は、平安時代の貴族政治が崩壊する時期とも重なって、全国的に広がりました。

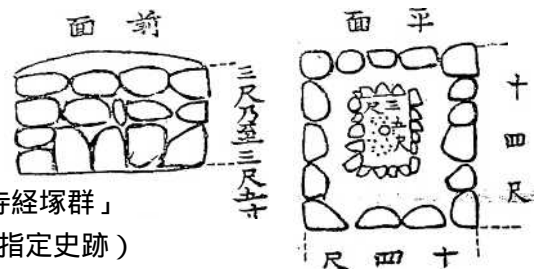
経塚造営の本来の目的は、釈迦が入滅してから56億7千万年の後に、弥勒（菩薩）が世に出て、仏教を再興するために必要な経典を未来に残すためです。そこで有力な貴族や地方の豪族たちは、作善事業として経塚を造営することにより、極楽往生や現世利益を願ったとされています。経塚は、まさに古代のタイムカプセルと言えるでしょう。

東城寺経塚群は明治37(1904)年、雑誌『考古界』で和田千吉が「常陸国新治郡東城寺村経塚の研究」と題して論考を発表してから全国的に知られるようになりました。和田は同35年6月に土浦を訪れており、常名の島田増次郎の助力により経塚の発掘を実施しています。この時、和田は島田を「常陸における考古学研究の熱心家」と称賛し、経塚の調査を充分になし得たのは島田のおかげであると記しています。しかし、経塚群はそれ以前の同23(1890)年には発見され、数多くの出土品が掘り荒らされていました。

和田と島田の調査により大小12基の経塚が確認され、一番大きな塚を大塚と称して実測図を記しています。これによると大塚は、14尺四方の石垣で囲まれ、蓋石があり、中央には3尺×5尺の石槨があって、木炭が埋められていたそうです。出土品（既に掘り出されていたものがほとんど）について和田は「数多くの発見品は博物館（東京帝室博物館、後に東京国立博物館）に買上げられたる他は、皆散乱して知るべからざりし（中略）今やその所在を失し、調査する能はざるは遺憾なり」と述べています。経筒（経典を入れる筒）だけでも全部で6点（明治23・37年発見の区別は不明）が確認されましたが、現在は東京国立博物館に2点しか残されていません。

東城寺経塚群は、その規模といい発見当初の出土品の多さからも、他に例をみない貴重な史跡となり得るものでした。56億7千万年後とは言わずとも、あと百年発見が遅ければと残念に思われるのです。

* 次号では、出土品の経筒について解説します。 1尺=30.3cm (中澤達也)



左：「東城寺経塚群」
(土浦市指定史跡)

右：和田千吉による大塚実測図

東城寺経塚群は古代・中世コーナーのメッセージ映像「般若寺と東城寺」でご覧になれます。

7/25(土)午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。
銅製経筒(複製)(古代・中世コーナーに展示)
妙法蓮華経(複製)(古代・中世コーナーに展示)
銅製花瓶(複製)(古代・中世コーナーに展示)



常陸国富有人注文(模造)

いろかわみなか

-色川三中が写した富裕者の記録

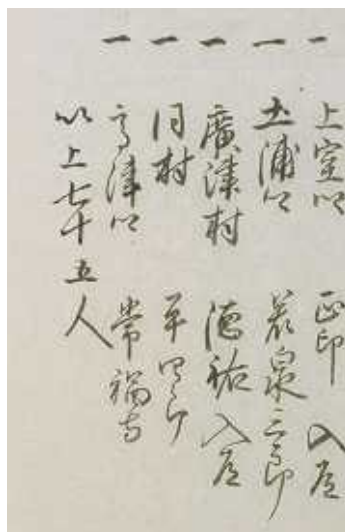
この資料は、江戸時代後期に活躍した土浦の国学者・色川三中が写した文書で、三中が編纂した『続常陸遺文』(実物は静嘉堂文庫所蔵)のなかに収められています。「常陸国中富有仁等可記申由蒙(仰)候之間人数注文(ひたちのくにじゅうふうゆうにんとう しるしもうすべきよし おおせをこうむりそうろうのあいだにんずうのちゅうもん)」と書かれた文書の表題から、一般に『常陸国富有人注文』と呼び慣らわされています。なお、注文とは注進とも言い、上部機関に提出する書状を意味します。写しには、文中の所々に三中の手による朱書きの注釈が書き込まれ、原資料の紙の破損も忠実に写し取っているなど、江戸時代後期まで伝来していた文書の状態をよく伝えていきます。

『常陸国富有人注文』は室町時代の永享7(1435)年に作成されたもので、当時常陸国南部にいた富有人(富裕者)75人を列記し、その名を具体的に明らかにしています。写しの文頭に「鹿嶋大祝所蔵(かしまのおおはふりしょぞう)」と色川三中が朱書きの注釈を施したように、この文書は鹿島神宮に遺されていたもので、鎌倉府の命によって鹿島神宮が社殿修理の費用を調達するために作成したものと考えられています。土浦では、「高津郷 常福寺」(市内下高津町に現存)が富有人に名を連ねるほか、「土浦郷 若泉三郎」の名も目を引きます。実のところ、若泉三郎がどの、どのような人物であったか明らかではありませんが、当時の有力者であったことは間違いないでしょう。「土浦郷」を今の土浦と重ね、若泉三郎の館が土浦城の基になったとの考えもありますが、これ以外の資料に乏しく、確かなことはよくわかっていません。

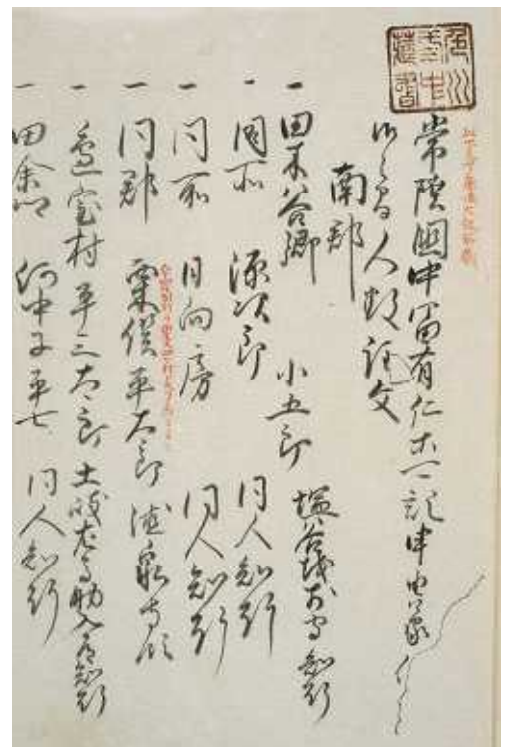
『常陸国富有人注文』から窺い知れる当時の富裕層は、おもに商人や上層農民、寺院のような宗教施設などが多かったようです。交通の要所に居住するものが多く、港(津)を拠点に活動する水運業などの存在も想定されます。とく

に、古霞ヶ浦に連なる内海の沿岸社会は富有人の分布が濃く、水運の便に恵まれ、周囲の地域に比べ経済的に成熟した地域社会を形成していたと想像されます。

(塩谷 修)



「土浦郷 若泉三郎」、「高津郷 常福寺」の記載部分



色川三中写し『常陸国富裕人注文』

8 / 22 (土) 午後2時から
このページで紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。
東寺百合文書(古代・中世コーナーに展示)
市内木田余出土の埋蔵銭(古代・中世コーナーに展示)



あさがおみずかがみ

牽牛花水鏡 (写真パネル)

- 土浦藩医と絵師の共同作品 -

土浦藩士岡部洞水（？～1850）は御用絵師です。平成14（2002）年、博物館では「知られざる狩野派の画人」という副題をつけ、初めて岡部洞水の特別展を開催しました。その後、博物館の所蔵品も増え、洞水の活動の様子も少しずつ明らかになってきました。

御用絵師は、普段は藩主のために絵を描いています。作品は藩主やその家族の居室を彩り、他の大名への贈答品や家臣らへの下賜品としても用いられました。

洞水の足跡は意外なところにもありました。朝顔の育て方の本『牽牛花水鏡』の挿絵を描いているのです。

朝顔といえば、夏の早朝を鮮やかに彩る花。種から育てたり、色水を作ったりした思い出のある方は少なくないでしょう。朝顔は奈良時代に中国から薬草としてもたらされましたが、色鮮やかで大輪の花は多くの人々を魅了し、江戸時代になって大流行しました。鉢植えで咲かせることができるので、庭を持たない町人や借家の人々でも楽しむことができます。朝顔はもちろん、桜草・松葉・蘭や万年青などを扱う植木市が盛んになり、珍奇な花や葉を栽培しては競い合う江戸の園芸熱は町人から武士や大名にも広がりました。

文政元（1814）年に出版された『牽牛花水鏡』には、変わり咲きの朝顔を咲かせるための土の選び方、肥料のやり方、育て方などが文と図で紹介されています。縦9cm余り、横は18cm。手元において気軽に見られる小型の本です。

末尾には作者の名が書かれています。右下の写真をご覧ください。「秋水茶寮瘦菊」は与住順庵（？～1831）が挿絵を描いた「濃淡齋洞水」が岡部洞水です。

じつは順庵も土浦藩から三十二人扶持をうけた奥医師（藩主とその家族を診察）でした。二人はともに江戸詰め藩士で、いわば同僚だったのです。薬草を用いる医師が植物に詳しくなるのは自然ですが、順庵は朝顔の花合わせ（品評会）を始めたり、朝顔専門の園芸書を刊行したりと、江戸の朝顔ブームを牽引した人物でした。

おそらくは順庵の朝顔趣味に、洞水が協力したのでしょう。洞水の絵画作品における植物や昆虫の描写には実物を詳細に見て描いた精確さがあります。早朝、挿絵を描くために朝顔を熱心に写生する洞水の姿が想像されます。（木塚久仁子）

参考図書『歴博ブックレット 朝顔を語る』（国立歴史民俗博物館、2001年）



『牽牛花水鏡』（部分） 原本の所蔵は東北大学図書館

<p>8 / 1 (土) 午後2時から このページで紹介した 資料の展示解説会を開催 いたします。</p>	<p>下記の資料もあわせてご覧ください。 岡部洞水画「三猿図」(近世コーナーに展示) " 「福祿寿図」(近世コーナーに展示) " 「唐子図」(近世コーナーに展示)</p>
---	--



霞ヶ浦と城下町の生業

- 水辺の城下町とその営み -

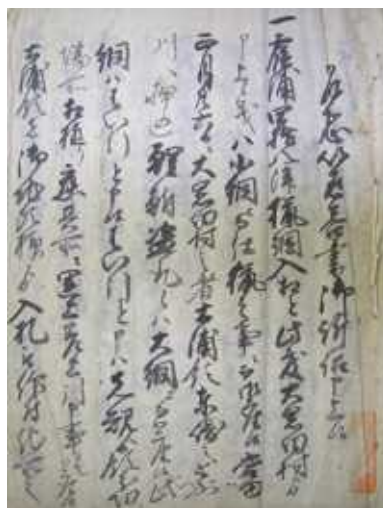
前号では「霞ヶ浦四十八津」をご紹介しました。江戸時代、霞ヶ浦を共同で管理・利用した四十八津の組織に、現在の市域からは3つの村が参加していました。そのひとつの大岩田村が、四十八津に属していない土浦城下の東崎町と争う事件が元禄4（1691）年におきています。城下町の東崎町は土浦藩領でしたが、当時の大岩田村は麻生藩領でした。

争いのひとつは、霞ヶ浦（土浦入り）の漁業権に関するものでした。東崎町が地先の土浦入りを、土浦藩の「城附」（土浦城に付属する水域、土浦藩管理の場所）だと主張し、霞ヶ浦を共同で管理してきた四十八津の村（大岩田村）と対立したのです。東崎町の主張では、土浦入りは土浦藩に^{うんじょう}（税）を納めるものだけに漁が許されているのに、大岩田村は東崎町のどぶ川までやってきて勝手に漁をしているというものでした（写真の史料に東崎町の主張が記されています）。一方の大岩田村は、霞ヶ浦を^{いりあい}入会とする四十八津の慣例をもって、「城附」という東崎町の主張そのものを否定しました。結局、この一件は幕府に持ち込まれて評定がなされ、大岩田村の主張（つまり四十八津の主張）が認められました。もうひとつの争いは、東崎町・大岩田村の水田などの境界に関するものでした。こちら大岩田村の主張が認められています。

さて、これらの一件で注目したいのは、土浦城下の東崎町における生業です。城下町というと商家が軒を連ねて、商人や旅人が数多く往来し、^{いち}市などでにぎわう情景が思い浮かびます。しかし、実際の土浦城下では、周囲に水田がひろがり、さらにその外側にひろがる霞ヶ浦や桜川で漁業が営まれました（空間構成概念図を参照）。周囲に広がる水田を利用して、商業のかたわら農業を営んだ人々もいました。たとえば薬種業・^{いりあひ}醤油醸造業をおこなった色川家では、城下町周辺の何ヶ所かに水田をもっていました。色川三中の日記「家事志」には、商いや町の人々のつきあいに関する記録とともに、田植えや稲刈りなどの記事がみられます。

写真の史料には、東崎町の鳥獵に関する記述もみえます。鯉や鮒といった魚だけではなく、水鳥も獲られていたのです。

霞ヶ浦は日々の営みにも恩恵をあたえるものでした。一方、この後のページでご紹介するように、水の災いをうけたことも土浦の特徴でした。城下町土浦には水とともに生きる人々の姿がありました。（萩谷良太）



東崎町の主張が記された史料
（当館所蔵）



マチの空間構成（概念図）

城下町土浦の空間構成（概念図）

7 / 4（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。
「霞ヶ浦四十八津掟書」（近世コーナーに展示）
霞ヶ浦の漁労用具（近代コーナーに展示）
「河川沼略図并収穫調書」（近代コーナーに展示）



洪水の写真絵葉書

- 災害を記録し、伝えたメディア

旅行先やイベントの記念に絵葉書を手に入れることはありませんか。なかでも写真を印刷した写真絵葉書は、名所や美術品などを視覚的にわかりやすく紹介し、お土産品としても重宝するものです。

日本に絵葉書が登場したのは、明治 33(1900)年のことで、民間の事業者に葉書の印刷・販売が許可されたことにはじまります。全国的に広まったのは、明治 37(1904)年から 38 年の日露戦争に際して発行された戦役記念の絵葉書で、多くの人々が収集し利用したようです。

日露戦争関係の絵葉書は、戦争の勝利を祝う記念品として、装飾された画面を楽しむ鑑賞物として、また戦地の状況を知らせる情報メディアとしての性質を持っていました。現在は事件や災害などのニュースは、テレビやインターネットで容易に知ることができますが、新聞の写真技術が未熟であった当時は、写真絵葉書はリアリティーを伝えるメディアでもあったのです。

土浦の災害を記録したものとして、明治 43(1910)年と昭和 13(1938)年の大洪水の写真絵葉書があります。前者は宛名面に「明治四十三年八月大洪水土浦知久製」というスタンプが押されており、田宿(現大手町)の平屋の建物が浸水している様子や、桜川の堤防に印半纏をまとった人々が集まる姿など、数葉を確認することができます。

昭和 13 年のものは、「昭和十三年六月三十日 土浦町大水害の実況」「昭和十三年六月三十日 未曾有の大惨害 土浦町大洪水」という2種類の袋が存在し、多数残る絵葉書に3種類のタイトルが確認できることから、それぞれ 10 枚程度の、少なくとも3シリーズが発行されたと考えられます。内容は、土浦駅前や大通りが浸水しているさま、船で移動する人々、炊き出しの様子などです。これらの写真はモノクロながらも、実に鮮明に、町並みや人々の姿を映し出しています。舟を漕ぐ手を休め、緊張した面持ちでカメラを見つめる人。なかには明るい表情も見られ、とくに長靴姿の子どもの笑顔は、次第に水がひき、町に日常が戻っていくことを予感させます。

新聞掲載の写真の増加や週刊誌の登場などにより、大正時代の後半には災害や事件を伝える写真絵葉書は発行数を減らしました。土浦に残された写真絵葉書は、明治 43 年と昭和 13 年の洪水という一大災害を記録し、人々に情報を伝えた稀少なメディアであったといえるでしょう。洪水の写真絵葉書はこの度発行した『土浦の洪水記録—先人が語る水とのたたかい—』(7 ページ参照)にも掲載していますので、ぜひご覧ください。(宮本礼子)



(左) 絵葉書袋 (2 種類・当館所蔵) (右) 「海軍道路敷島町 昭和十三年六月三十日 茨城県土浦町大水害ノ実況」(現桜町一丁目附近・当館所蔵)

9 / 5 (土) 午後 2 時から
このページでご紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料(映像)もあわせてご覧ください。
色川御蔭「防逆水私議」(近代コーナーに展示)
水難克服のチラシ(近代コーナーに展示)
「洪水の思い出」(近代コーナーメッセージ展示映像「体験談」)



市史編さんだより

～ ～ ～ 博物館編さん『土浦の洪水記録』が発刊されました ～ ～ ～

初めに謎々を一つ。怖いものの代表といえば「地震^{かみなり}雷^{おやし}火事親父」でしょう。でも洪水も怖いはずなのに入っていないのは何故か？つまり、洪水と前の4つとの違いは何ですか、という問題です。

それはひとまず置いといて、私は漢和辞典に「水が地上に溢れみなぎること」とあるのを鵜呑みにして、洪水とは河川や湖沼から溢れた水が田畑や町内に漲^{みなぎ}ることだと思っていました。ところが前館長の岩崎宏之先生に「そうじゃないでしょ」といわれてびっくりしたのです。早速小学館の『日本国語大辞典』を引くと、「大雨・雪どけなどのため、河川の水が増加して溢れるばかりになること、又その水が堤防を破って地上に流出すること」とありました。つまり、日本で「洪水」というのは2段階あったのです。三省堂の『地理小事典』でも、「河水が異常に大水量になり、川から溢れ出るような状態」で「洪水の状態が著しくなると、堤防を決壊して氾濫する」とあります。平凡社の『地学事典』では、「水が河道その他水体からあふれ出したり、それらが低地に集まったりした状態」とあります。河川敷とか畠や建物のある中洲が水没するような状態も、洪水の範囲に含まれそうです。江戸時代、洪水の状況を7合5勺とか8合とか表しています。10合(1升)を越えると、堤防から水が溢れ出すわけですが、これを「総越し」と言っています。しかし堤防を越えないでも、堤防の外に降った雨などが低地に溜^たまって、洪水になることが屢々^{しばしば}あります。

岩崎先生が洪水の問題に取り組み始めたのは20年も前と思いますが、その仕事を受け継ぎ1冊の本にまとめようということになったのは、3年ほど前のことでした。博物館全員の協力体制も出来、何度か話し合いがもたれ、できるだけ多くの人に読んでもらえるように、そして史料としても十分に役に立つように、例えば江戸時代の記録は、当時の雰囲気伝えるため文語文の形を残しながらも、送り仮名や注を入れることで読みやすいものにするということになりました。そして今、ようやく『土浦の洪水記録』ができあがったわけです。

岩崎先生がこの本を出したいと言われたとき真っ先に賛成したのですが、それは私の子供時代、昭和13・16年と2度の水害を水戸で経験していたこともありました。この本には4人の小学生の作文が載っていますが、いずれも読みながら当時の大水の様子をまざまざと脳裏に思い描くことが出来ます。

さて、この辺で最初の謎々に戻りましょう。編さん係の答えはこうです。前の4つは不意にやってくる、つまり何時、何処で来るか分からない(親父の拳骨^{げんこつ}だってそうですよね)ものだけど、洪水はある程度予測できるものだから、ということです。嵐が来る、大雨や長雨が降る、それが遠い川上の方であっても危険の知らせです。尤も、もっとよい答えがあるかも知れませんね。それはお任せします。

「災害は忘れた頃にやってくる」という諺^{ことわざ}があります。この諺を逆にすると「災害は忘れなければやってこない」となります。でも逆は必ずしも真ならずです。この本の中の「防逆水私議」でいうように、水害には天災の部分と人災の部分があります。天災は忘れなくともやってくるでしょうが、忘れずに備えておけば、天災の部分を少なくし、人災の部分避けることができるのではないのでしょうか。

歴史に学べ、ともいいます。その意味でもこの本を多くの人に読んで頂きたいと願っています。



雨谷昭(社会教育指導員)

『土浦の洪水記録 - 先人が語る水とのたたかい - 』は博物館受付で発売中(定価2,000円)



霞 短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。今号は第30回特別展で取り上げた沼尻墨僊ゆかりの人物・嘉八について、ご子孫のおひとり石塚英岳さんにご紹介いただきます。

墨僊こぼれ話・嘉八のこと

今からおよそ150年前の万延元(1860)年1月、勝海舟や福沢諭吉、ジョン万次郎等と、アメリカ人11人を含む総勢107名が、木造蒸気船の咸臨丸で、日本人として初めての公式訪問地であるアメリカを目指して、横浜の港を出港したことは周知の事ですが、この船に土浦出身で火焚小頭として乗船していた墨僊ゆかりの男を紹介致しましょう。

この男の名前は嘉八、姓は内田で、号は一醉庵ですからお酒が大好きだったんでしょう。

嘉八の父親は、墨僊の三番目の兄で、大町の内田野帆の養子となった與右衛門です。與右衛門の父は、代々漢方薬を商い問屋を業として、中城町の町年寄を勤めた中村治助です。だから嘉八は墨僊の甥となります。

咸臨丸に乗り込んだ水夫と火焚は総勢50名で、その内35人が瀬戸内海の塩飽諸島出身、14人が長崎出身で、その他は土浦の嘉八だけでした。「嘉八は大阪へ行って船乗りになり、腕が良いので咸臨丸の乗組員に選ばれたと聞いております」と云う私の祖母の話が残されております。

嘉八は、乗船中やサンフランシスコ及び途中燃料補給のため立ち寄ったハワイなどの見聞を、日誌として書き溜めていたものを、帰国後「異国の言の葉」を表題として、墨僊の甥らしく、冊子本に達筆で書き改めました。序文の一部には、航海の苦難を思い浮かべ「是等の事を思い出して、心細くも寝覚悪敷の折から、見し儘聞留し事、酒狂の上筆を取りて、つたなき事而已著す事なり」と記し、見聞録を書き始めております。

ギャマンの青いカットグラスを土産に、帰国後は名字帯刀を許され、水主同心格で二人扶持となりました。石塚英岳(「笹屋七郎兵衛」)

コラム(8) 博物館としてのスキルアップ

初めて学芸員の職名を受けた時、展覧会事業で名品を借りてくるにはどうしたらよいかを先輩に相談したことがあります。しかし、当館みたいな開館して間もない市町村レベルの博物館が、他県の著名な館から名品を借りるには、何かと難しいとのことでした。事実、中には断られたこともあったそうです。では、どうしたら対等に資料の貸し借りが出来るようになるのかを尋ねました。そうしたところ、学芸員のスキルアップは勿論のこと、調査研究の積み重ね、そして当館も他館に誇れる名品(国指定文化財など)を持つことだと教えられました。

あれから10年、土浦市立博物館は今や文化庁が認める「公開承認施設」(国指定文化財の公開に関する承認施設)となり、国宝1、重要文化財7、重要美術品8点を保管する館となりました。平成19年には展示室もリニューアルされ、大規模な展覧会も実施できるようになりました。

これからも少しずつではありますが、更なるスキルアップを図り、成長し続ける博物館でありたいと思います。(中澤達也)

情報ライブラリー更新状況

【2009・7・1 現在の登録数】

古写真 421点(+5)

絵葉書 324点(+11)

()内は2009年5月16日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2009年度

夏季展示室だより(通巻第8号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~6ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2009年度秋季展示は、2009年10月1日(木)~12月下旬となります。「霞」2009年度秋季展示室だより(通巻第9号)は10月1日(木)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。